


今 月 の 一 冊

元木更津市教育委員会教育長 西村 堯 選

沖縄県知事 —その人生と思想—

野添 文彬（ふみあき） 著 ・ 新潮選書

ISBN978-4-10-603889-1

1,600 円 + 税

2022 年 5 月 15 日、沖縄が日本に復帰して 50 年になる。

しかし、

沖縄県には在日米軍専用施設(米国が管理し専ら在日米軍が使用する基地)面積の 70.3%が集中している。

（「はじめに」より）

沖縄県知事と他府県知事との大きな相違点は、国の専権事項である外交、防衛に係る基地問題のウエイトが非常に高いことにある。業務量はともかく、頭の中の 7～8 割は基地問題で占められる。

【1998 年～2006 年、沖縄県知事稲嶺恵一氏の言葉】

（「はじめに」より）

そして、今、もし、「台湾有事」の際は、沖縄県が最前線となるであろう。このような厳しい緊迫した状況下、知事就任前の人生の歩みも含めて、「その人生と思想」について詳しく検討し、述べたのが本書である。

その8人の知事は以下の方々である。

屋良 朝苗	やら・ちょうびょう	琉球政府行政主席 1968 年～ 1972 年 知事 1972 年～ 1976 年
平良 幸市	たいら・こういち	1976 年～ 1978 年
西銘 順治	にしめ・じゅんじ	1978 年～ 1990 年
太田 昌秀	おおた・まさひで	1990 年～ 1998 年
稲嶺 恵一	いなみね・けいいち	1998 年～ 2006 年
仲井真弘多	なかいま・ひろかず	2006 年～ 2014 年
翁長 雄志	おなが・たけし	2014 年～ 2018 年
玉城デニー	たまき・でにー	2018 年～現在

今、「県知事就任前の人生の歩みも含めて」と書いたが、ここに、本書の大きな特色がある。

歴代知事の生い立ち、すなわち沖縄戦体験や米国統治下の経験についても詳しく見ていく。彼らが前半生でどのような人生を歩み、その中でどのような思想を培ったのかを見ていくことは、「保守か革新か」などの単純な二項対立を相対化し、彼らが沖縄や日本、国家の安全保障に対してどのような考えを持っていたのかを理解する手がかりを与えてくれるだろう。

(p.6)

と著者は述べる。

私(西村)は、本書が単なる沖縄県政史ではなく、生身の人間としての知事たちの苦悩と共に、躍動感をもって迫ってくるのに深い感銘を覚えた。

8 人の知事たちの「人生と思想」については、ぜひ、本書を読んでいただきたい。ここで、翁長氏の思想と行動について触れておきたい。

翁長氏は、自民党沖縄県連幹事長時代には、「辺野古移設」を容認するとい

う「苦渋の決断」をした。しかし、やがて沖縄県知事としては、「辺野古移設」に反対し、日本政府と対峙するようになった。その政治姿勢は大きく変化したのである。その変化について、著者は、以下のように述べる。

しかし、今の日本の政治家たちや多くの日本国民は沖縄の歴史に理解を示さず、沖縄に米軍基地を置いて当たり前だと考えていると翁長の目には映った。特に翁長は「今の自民党は日米安保、日米同盟が最優先」であり、「そこからは沖縄県の民意が完全に抜け落ちてい」ると考えていた。今の日本政府・自民党は、沖縄を歴史的・心情的に理解しようとするのではなく、「領土としての沖縄」しか見ていない。日本政府が強調する沖縄の米軍基地の「抑止力」も「そこで守っているのは日本本土だけ」だと翁長は捉えていたのである。

(p.254)

私には、「そこで守っているのは日本本土だけ」という言葉が、ぐっと突き刺さる。また、「沖縄を歴史的・心情的に理解しようとするのではなく…」という言葉にも突き動かされる。読者の皆さんはどうだろうか。

本書を取り上げるのは、沖縄が本土復帰を果たした 5 月、あるいは組織的沖縄戦が終結した 6 月でも良かったかも知れない。しかし、私には、「鎮魂の月」である 8 月に取り上げたいという思いがあった。

「鎮魂の月・8 月」に、保守・革新を問わず、「沖縄の心」、「沖縄の歴史」に改めて深く触れてみたいのである。